

Title	「物性研究」誌にみる寛容さ(<特集>「物性研究」と私の思い出)
Author(s)	川崎, 恭治
Citation	物性研究 (2012), 97(6): 1195-1196
Issue Date	2012-03-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/172070">http://hdl.handle.net/2433/172070</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 「物性研究」誌 にみる寛容さ

川崎 恭治<sup>1</sup>

私と「物性研究」誌とのかわりは「物性論研究」とっていた頃まで含めると半世紀をこえる。しかし研究会報告などを別にすれば余り投稿はしなかった。それでも若い頃は外に情報源が少ない事もあって「物性論研究」は貴重な情報源であった。また1973－75年基研の教授をつとめたときには編集に関与した。その頃になると情報源がほかにも色々あって、今度は原稿を集めるのに苦労した。本誌もいよいよ最終号を迎えるとの事なのでその間に自分にとって最も印象が深かったある出来事について書いてみたい。それは1996年か97年ころであったと思う。今、記録が手許にないし記憶違いもあるかと思われるがその時はご容赦ねがいたい。

その頃、基研主宰の国際夏の学校 YKIS が「スローダイナミクス」のテーマで開催された。当時は臨界現象が一段落してそこで使われていたモード結合理論がスローダイナミクスに応用され、特に欧米ではその当否をめぐって盛んに論争されていて、少なくとも外国では物性物理の最も exciting なテーマであった。わが国でスローダイナミクスの国際研究集会をひらくのであればモード結合理論 (MCT) も当然主要トピックの一つとしてとりあげられるべきであった。この問題は理論のほかに実験と計算機シミュレーションに依る検証が欠かせない。ところがどうした事かこの理論の専門家がはずされていた。このためにこの様な国際会議の主要な目的である筈の実験、計算機シミュレーション及び理論の専門家による徹底した討論を通じて MCT の適否の問題に光をあてる事ができなかった。事実この偏ったプログラムについて何人かの外国の参加者から筆者に不満がもたらされた。私も釈然としなかったので、問題点の詳細をまとめて「物性研究」に投稿した。そこでは一切遠慮することなく私の疑義をあからさまに述べた。穏当を欠いた箇所もあったかもしれない。しかし原稿は「物性研究」編集部の方で問題にされる事なく翌年だったと思うが掲載された。YKIS とする公的な催しについて、どういう意図があったにせよ一部の人の私的な都合でねじまげてよい筈はない。この間のより微妙な事情はスローダイナミクスの MCT に関心を持たない人には実感として掴めないと思うが、前述したように外国からきた専門家が奇異な感じをもった事でご察しねがいたい。

私は事の重大性からこの事実を、より広く知ってもらうために「物性研究」に投稿した記事を短縮したものを物理学会誌の「会員の声」欄に投稿した。しかしどうしてか掲載を拒否されてしまった。

もし私の記事が特定個人名をあげて非難中傷するようなものであれば拒否は当然であろう。しかし「物性研究」に出した原稿も物理学会誌に投稿した原稿も個人名をあげて非難中傷することは

<sup>1</sup>現住所：〒 811-0215 福岡市東区高美台 4 丁目 37-9  
電話：092-607-4022 e-mail：tomo402000@yahoo.co.jp

一切していない。このような会員の自由な声を納得できる理由を示さぬまま拒否することが許されるとは全く理解できない。まるで反原発の主張の発表が抑えられてきた暫く前までのことがおもいだされる。後で当時の物理学会誌の編集長に会ったとき抗議をしたら「先生にはもっと高邁なことを書いてもらいたい」といわれた。いくら”高邁”かもしれないが無内容な当たり障りのないことを書くほどわれわれは暇人ではない。またこんな記事しか載せない雑誌を開いてみる気にはなれない。(私事ですが私は物理学会を退会したので最近の会誌は見えていません。)私はここに自由な意見を拒否しない「物性研究」誌の真価があると思っている。「物性研究」誌は廃刊後ネット上でみられるとの事だが私が経験した自由な雰囲気は今後も持ち続けてほしいと願うものである。尤も個人のホームページで議論すれば事足りる、わざわざ雑誌にする必要がないとの意見もあるとおもうが私にはわからない。ただ言えることは自由に意見の公表が出来なくなる雰囲気からは独創的な研究など始めから望むべくもない。ついでに言えば今回の原発事故について危険性が繰り返し指摘されていたが、その自由な公表が色々と制約されていた事が今ではわかっている。学問であれ社会であれ異端の意見を押しさえつけることがどんなに有害なことか、我々は思い知った筈である。

このYKISから15年経った今、当時私が懸念した事が現実になっている。MCTによるスローダイナミクスの研究はその後欧米を中心に長足の進歩をとげ、今ではスローダイナミクス研究の欠かすべからざる一部分になっている。YKISの当時まだ残っていたMCTに対する疑念は徹底的に検討され、今ではMCTの位置づけは、その欠陥も含めて、確定していると言ってよいだろう。残念ながらこの期間におけるこの分野へのわが国からの寄与は皆無に近かった。(次ぎの付記参照の事。)また前述したYKIS以後もわが国でスローダイナミクスの国際研究集会がいくつもひらかれて私もそのあるものには出席したが私が知る限りここで述べたような不祥事はなかったと理解している。

#### 付記

ここでわが国からの寄与といているのは日本に研究拠点を持っている人の仕事という意味である。一例として筑波の宮崎州正さんを取りあげてみる。彼はライデン大学及びコロンビア大学での研究経歴がながく、海外のこの分野のトップクラスの人々に伍していくつものすぐれた業績を上げている。しかしこれらの業績はわが国からの寄与ではない。彼は今では筑波でご自身の研究室をもち、そこで顕著な業績をあげている。これらは正真正銘の、わが国からの寄与であるがそれらは極く最近のお仕事であるのでここでは省略した。また関連した研究をしている人々に東大の佐々真一さんや湯川研の早川尚男さん達のグループがある。またスローダイナミクス以外の問題でMCTをやっているグループもあるがここではとりあげなかった。